

復興遠く 熊本地震3カ月—AMDAの活動から

強い日差しが照りつける7月上旬の午後。外の気温は30度を超え、多くの家族連れやお年寄りがいる体育館はクーラーをつけていても蒸し暑い。

「これだけ気温が高くなると熱中症が心配。食べ物が傷みややすく、食中毒にも気をつけなさい」と

熊本県益城町の町立広安小学校で、吉井治さん(47)が頭を悩ませる。熊本地震で避難所となった同小の体育館内に救護所を開設している国際医療ボランティアAMDA(岡山市)の現地スタッフだ。

益城町は4月14、16日の2度にわたり震度7の激震に見舞われ、甚大な建物被害が出た。町中心部の広安小には今も、自宅が壊れるなどして約120人が身を寄せている。

鍼灸師の吉井さんは同業者5人と連携。広安小を週3回訪れ、体調不良を訴える人たちをケアしている。

益城町は、家屋約1万2千棟のうち約5千棟が全半壊し、一部損壊を含めると全体の約8割が被害を受けた。行き場を失った住民は近くの小学校や体育施設に避難。地震直後の約1万6千人をピークに減ってはいるが、今も約1600人が

「あの日」の恐怖 今も

⑤ 爪痕

避難所生活を続ける。

熊本県中北部の合志市に住む吉井さんも家の壁にひびが入った。AMDAの救護活動をホームページで知り、「より深刻な被害に苦しむ人の力になりたい」と地震から10日ほどして協力を申し出た。

広安小で1日に対応するのは30人前後。吉井さんは、長引く避難生活で住民の疲労が増していると感じており、要因にプライバシーを確保しづらい環境を挙げた。避難所に人があふれていた当初と違い、今は1人1畳のスペースが保たれ、カーテンの間仕切りもある。だが、話し声が気にな



広安小の避難所。個々のスペースがカーテンで仕切られてはいるが、プライバシーは確保しづらい

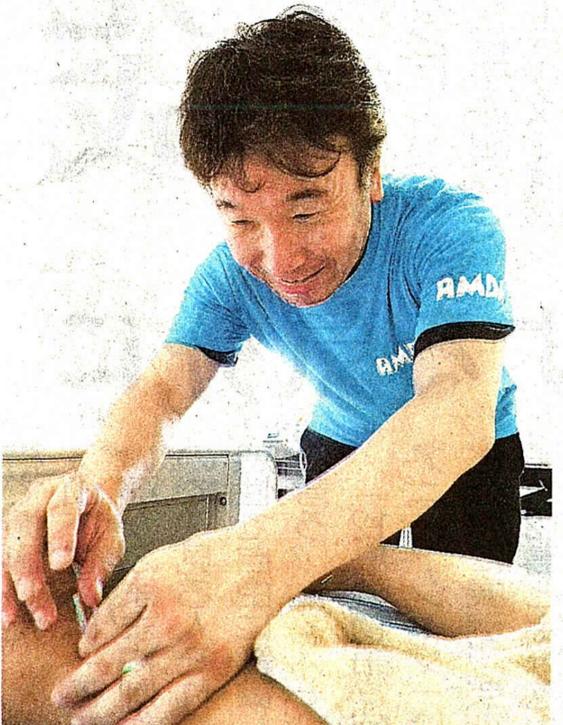
吉井さんは言う。

「ちょっとした揺れを感じたら、『あの日』を思い出して怖くなる」

鍼灸治療を受けている徳山秀人さん(70)。4月14日の「前震」の際、突き上げられるような衝撃で目が覚め、気付くとたんすの下敷きになっていた。隙間から抜け出し、着の身着のまま広安小に避難。16日の「本震」では「校舎が振り子のように揺れ、恐ろしさに震えが止まらなかった」。

半壊した自宅に住めないことはない。だが、余震が怖い。がれきの撤去作業で生じる振動でさえ、反射的に体がこわばる。精神的に不安定になっているためか夜中のトイレも地震前より頻繁になり寝不足だ。「できるだけ家にいたくない」と、自宅と避難所を行き来する生活を続けている。

光景がフラッシュバック



「長引く避難生活のストレスは、じわじわと心身をむしばむ」。吉井さんは避難者の体調を注意深くチェックしている

ズーム

熊本地震による益城町の被害

観測史上初めて同じ場所で震度7を2度記録。家屋被害(6月末現在)は全壊2551棟、半壊2609棟、一部損壊4893棟で計1万53棟。倉庫や店舗など家屋以外の建物も全約6500棟のうち5888棟(同)が損壊し、町役場や中学校などの公共施設も一部被災した。死者は関連死1人を含めて21人。

する、急に涙が出る、眠れない、建物に入れない……。過去に味わったことのない地震の恐怖に「多かれ少なかれ被災者はみんなトラウマ(心的外傷)を抱えている」と吉井さん。その上、経済的負担ものしかかる。

見積もりの結果、徳山さん宅の修繕には200万円かかることが分かった。一部は被災者への義援金で賄えるが、蓄えも吐き出さなければいけない。「生活は一体どうなるのか」。先行きが見えない状況に徳山さんの不安は募るばかりだ。

熊本地震の「本震」から16日で3カ月。被害が集中した熊本県益城町の住民は心に傷を負い、生活再建の見通しも立たない。現地で支援を続けるAMDAの活動を追い、被災地の今を伝える。